

## 目次

知的に、笑顔で、語り合おう——「韓国知識人との対話」シリーズ刊行にあたって i

はじめに 1

第1章 日韓の溝、その深さ……………7

1 「竹島」というトゲに潜むもの（小説家 金辰明氏と語る） 9

自衛隊出動で日本に核攻撃が？／日本の変化は止められない／南北分断という痛み／韓中を接近させるもの／「日本が好き」ではあるけれど／劇的な和解は可能か

2 安重根から見えてくるもの（歴史家 崔書勉氏と語る） 23

義士かテロリストか／伊藤博文と日韓保護条約／「アジア団結」を唱えたが／義士・安重根への意外な評価／岸信介からの伝言／国交正常化五〇年の積み重ねを大切に

3 慰安婦問題、その悩ましさ（世宗大学教授 朴裕河氏と語る） 34

解決をはばんだ両極端の主張／「同志的關係」という切なさ／責任の所在はどこに／朝日新聞批判の構造／日本の国会に望むこと

第1章の対談を終えて 49

第2章 生き証人が語る「あの時」……………51

1 外交官が見た条約調印への決断（元外交部長官 孔魯明氏と語る） 53

押し寄せるデモ隊と非常戒厳令／朴大統領の悲壮な覚悟／信じられなかった金大中事件／教科書問題から「パルトナーシップ宣言」へ／両首脳への願い

2 「条約反対」から「日韓親善」へ（韓日親善協会中央会長 金守漢氏と語る） 68

反骨の学生時代／「屈辱外交反対」のスポークスマンに／韓日議員連盟で活動／社会党とも関係づくり／日韓関係の今昔

3 劇的な「金大中訪日」の演出（元駐日大使、高麗大学名誉教授 崔相龍氏と語る） 81

「奇跡は奇跡的に訪れはしない」／政治家の妄言に一喜一憂しない／日本文化の開放に踏み切る／独仏のように和解できるか／日韓の壁をどう乗り越越えるか

第2章の対談を終えて 95

第3章 ジャパン・ウォッチャーたち……………97

1 東京特派員から見た日本（元東亜日報編集局長 鄭求宗氏と語る） 99

歴史教科書問題と日韓メディア／ハンケル世代としての「日本を知る企画」／感心してばかりの東京生活／日本研修が生きた朝刊紙への転換／弾圧された独裁時代／日韓メディアの右傾化を憂える

2 日本政治を見続けて（ソウル大学日本研究所長 朴喆熙氏と語る） 114

スタートは中曽根氏の世界平和研究所／ドブ板選挙を体験／ボスがなくなつた日本政治／「支配階級」なく、対立激しい韓国／「草の根保守」が広がった日本／韓国式の派手な喧嘩には愛情も

3 歴史観を近づけるために（ソウル市立大学教授 鄭在貞氏と語る） 129

「独島体験館」の企画意図／歴史教育にバランス感覚を／進歩した日本の歴史認識／歴史共同研究の試み／「東アジアの地中海」という発想を

第3章の対談を終えて 144

第4章 スポーツ・芸能の世界で……………147

1 「宿敵」同士、よき切磋琢磨を（元サッカー韓国代表チーム監督 洪明甫氏と語る） 149

ロンドン五輪でのハブニング／Jリーグで学んだこと／池田コーチを招いたわけ／アジアのサッカーと未来

2 韓流ブームの先駆けとして（歌手 趙容弼氏と語る） 163

一五年ぶりの東京公演／世代をつなぐ新曲に挑戦／紅白歌合戦から北京、そして平壤へ／「釜山港へ帰れ」の歌詞の秘話／予想されたK・POPブーム

3 「韓流」と「日流」を読み解く（一橋大学准教授 権容奭氏と語る） 176

「架け橋」を決意した少年時代／映画「シユリ」とドラマ「冬のソナタ」／衰えない韓国の日本文化人気／JKカルチャーの模索を

第4章の対談を終えて 192

第5章 市民社会と草の根交流……………195

1 船上の日韓交流をプロデュース（環境財団事務総長 李美景氏と語る） 197

「ピース&グリーンボート」／セウォル号事件とフクシマ／カルチャーギャップを越えて

2 日韓とアジアの学生交流を語る（東西大学総長 張済国氏と語る） 209

アメリカ留学から日本の商社へ／サハリン在留韓国人の子孫を招く／多彩な大学間交流に活路／いまの留学組が日韓関係を変える

3 自治体が果たす外交の役割（全羅南道知事 李洛淵氏と語る） 221

日韓で活発な知事交流／日本企業の投資で活性化／日韓首脳の長所と短所／記者時代に接した歴代の大統領／メディアへの思い

第5章の対談を終えて 234

第6章 未来をつくるために……………237

1 「首都の交流」に思いを秘めて（ソウル市長、元市民派弁護士 朴元淳氏と語る） 239

日本社会のよさに学ぶ／「北京、ソウル、東京」のパートナーシップを／過去の始末をきちんとつける／若い人たちが未来を築く

2 ナシヨナリズムの克服と知識人の役割（ソウル大学教授 宋虎根氏と語る） 252

国家の無力を見せつけたセウォル号事件／「ごめんなさい」というスローガン／日本は「大国としての翼」をもて／歴史的対峙を弱める必要性／「独島・竹島」を友好の島に

3 「ソフトパワー立国」のすすめ（元文化庁長官 李御寧氏と語る） 269

「縮み」志向を忘れた日本／日中韓は「じゃんけん」の関係がいい／「失われた二〇年」こそ素晴らしかった／ポピュリズムと民主主義／日中韓で共通の漢字を

第6章の対談を終えて 282

おわりに 285

参考文献 289  
インタビュースト

292

## はじめに

韓国人の「反日」感情は強いと、よく言われる。無理やり国を併合されて三五年間も支配され、その間に無謀な戦争にも付き合わされたのだから、それも仕方ない。だが、今やその植民地支配が終わって七〇年、過去を清算して国交を開いた一九六五年の日韓基本条約から五〇年もたった。この間に日本は奇跡的とも言える韓国の経済成長や民主化を支援してきた。人の往来が五〇〇倍にも伸びたほか、さまざまな交流も深まり、日本にはドラマやK-POPの韓流ブームも起きた。首相らは謝罪も繰り返し、サッカーのワールドカップ（W杯）共催でも和解ムードは盛り上がったはず。もう、そろそろ勘弁してほしい……というのが多くの日本人の偽らざる気持ちだろう。

にもかかわらず、日韓の政治関係は昨今、「最悪」とまで言われるようになってしまった。従軍慰安婦の問題がこじれたのをきっかけに二〇一二年夏、李明博大統領が竹島（韓国名、独島）行きを断行した。一方、そのあと日本では安倍晋三首相が二〇一三年暮れに靖国神社の参拝を断行するなど、歴史認識をめぐる言動で韓国を刺激する。これに反発する朴槿惠大統領が「正しい歴史認識を」と求めて日韓首脳会談に応じようとする。こんな首脳たちの応酬は、国交が開かれて以後、ありえないことだった。そんな中、日本を覆っていた韓流ブームも熱が冷め、いつしか「嫌韓」ムードに切り替わった風がある。

いったい、これはどうしたことか。若いころソウルへ留学して以来、この国に関心を寄せてきた私は、日韓条約五〇周年を控えて韓国の知日派を中心とする知識人らに連続インタビューを試みた。この五〇年をどう評価し、現在、そして未来をどう考えているのか、意見を交わしたかったからだ。おかげで元外交官や学者、首長、作家、ジャーナリスト、歌手、スポーツ選手、そして市民運動家など多彩な一八人に登場していただき、さまざまな声を聴くことができた。

その結果はこれからゆつくりとお読みいただくとして、まずはその前提として、戦後の日韓関係について整理しておきたいと思う。

一九一〇年から三五年間にわたった朝鮮半島の植民地支配に幕が下ろされたのは、日本が太平洋戦争に敗れた一九四五年のことだ。それから日韓に国交が開かれるまでに二〇年の歳月を要したわけだが、それを含めた七〇年間を私は次の四期に分けて考えている。

第一期（一九四五～六五年） 国交のなかった不正常な時期

第二期（一九四五～八八年） 韓国の軍市政権下での反共の連携期

第三期（一九八八～二〇〇二年） 韓国の民主化による自然な友好増進期

第四期（二〇〇三年～） 諸矛盾の噴出による友好の反動期

まず第一期は、日韓の間に国交がないまま混乱が続いた時代である。この間に朝鮮半島は南北に分かれて激しい朝鮮戦争（一九五〇～五三年）を戦った。日本は韓国支援に出動する米軍に基地を提供して後方から支えながら、戦争の「特需景気」によって経済成長の道を歩み出した。一方、反日色が鮮明な韓国の李承晩政権はいわゆる「李承晩ライン」を引いて竹島を自国領に組み入れ、実力占拠に

至る。李ラインを越えた漁船は拿捕し続けた。日本は抗議を繰り返したが、植民地支配に対する罪の意識や反省が乏しかったこともあり、日韓の国交交渉はもめ続けて一四年にも及ぶのだった。

第二期は、六二年の軍事革命で生まれた朴正熙政権のもと、ようやく日韓基本条約の締結にこぎつけたところから始まる。米国とソ連・中国による東西冷戦が深刻な時代にあつて、韓国の軍事独裁政権と日本の強固な保守政権が「反共」によつて結び合うという戦略的關係だった。竹島の問題は事實上、棚上げされた。朴大統領は七九年に側近の銃弾に倒れて一八年の治世を終えたが、「反共連合」的な構造は次に生まれた軍事政権の全斗煥体制でも引き継がれた。この間、日本の経済協力もあつて韓国は飛躍的な経済・社会の発展をとげた。

だが、日韓はいわばお互いの「嫌な点」に目をつぶりながらの連携だった。実は日本人は韓国の独裁政権に眉をしかめ、韓国民は日本に植民地支配の反省が乏しいと不満だったのだ。この矛盾が時に大きく噴き出す。七三年に野党政治家の金大中氏が韓国の情報機関に拉致されるという衝撃的な事件が東京で起きる一方、八二年には日本の歴史教科書が「歪曲だ」と激しく問われたのはその代表的な例だった。

第三期は韓国の民主化とともに始まった。八七年、国民の直接投票による大統領選が行われて元軍人の盧泰愚氏が勝ち、翌年に政権に就く。八八年にはソウル五輪も開かれ、韓国の近代化と民主化に拍車がかかった。長く野党の政治家だった金泳三氏、さらに金大中氏が大統領となつて、それが極まった。

世界的には冷戦時代の終わりに重なり、これを背景に日本では自民党の一党支配が終わつた。「非

自民」の連立による細川護熙政権や、自民党が社会党党首をかついだ村山富市政権が生まれると、首相による「侵略」や「植民地支配」への謝罪が続いた。戦後五〇年にあたる九五年の「村山談話」がその典型だ。また、金大中大統領と小渕恵三首相が九八年に署名した「日韓パートナーシップ宣言」は和解の頂点となり、二〇〇二年のW杯共催はその象徴的な催しとなった。映画、ドラマ、ポップスの世界に広がる韓流ブームも盛り上がりのきっかけをつかんだ。

だが、実はこれと並行して第四期につながる不穏な空気も生まれていた。民主化や近代化によって高揚する韓国民には、かつて強権的に抑えられた「抗日」の気分が育ち、戦後補償の問題などでそれに呼応する裁判所の判断も続く。一方、首相が謝罪を続けた日本には「いつまで謝ればいいのか」というストレスが生まれていた。従軍慰安婦や竹島問題の表面化、あるいは首相の靖国神社参拝、さらに「村山談話」の見直し論も争点となって今日に至る。

第四期をどこからと見るかは判断が難しいが、あえて二〇〇二年にW杯共催が終わったときを区切りしてみた。すでに小泉純一郎首相の靖国参拝などで対立の芽が出ていたが、対立の激化を抑えていたW杯共催という共通目標がなくなったことで、矛盾が次々に噴き出したからだ。この年の九月には小泉首相が日朝の国交正常化をめざして平壤を訪問したが、拉致された日本人の存在がはつきりしたことによって、かえって北朝鮮への激しい感情が噴出したことも、間接的に日韓関係に響いた。また、このころから強大化した中国が何かと日本とぶつかり合うようになる一方、韓国がかつて敵国だった中国と親密になっていったことも影を落としている。こうしたことは六五年には全く考えられないことだった。

さて、私が朝日新聞の記者として初めて韓国の土を踏んだのは七九年八月だった。ソウルのほか板門店などの軍事境界地帯も視察し、日本ではわからない緊張を味わったが、たまたま翌八〇年には自民党のグループに同行して北朝鮮を訪れ、この国の創建者だった金日成主席にも会えた。今度は北から板門店を訪れるという貴重な体験もした。

そんな偶然が重なったことから志願して八一年秋から一年間、ソウルに留学して韓国語を学ぶことになる。留学中にソウル五輪（八八年）の開催が決まったほか、歴史教科書問題の噴出によって日韓に横たわる大きな溝を思い知らされた。その後はほとんど東京での政治取材に明け暮れたが、全斗煥大統領の訪日と歴史的な天皇との会見（八四年）を取材するなど、日韓の外交を間近に見る機会は多かった。九三年に発足した「日韓フォーラム」にも参加し、何かと韓国との縁も深まった。

留学以来、あつという間に三〇年以上の歳月が流れたが、二〇一三年一月に朝日新聞を退職したのを機に、すっかり錆びついた韓国語を少しでも取り戻そうと、半年の「再留学」を試みた。その後にはじめたのがこの一連のインタビューだった。

さて、前置きはこのくらいにしておき、さっそく韓国の皆さんに登場していただく。

## 第1章

---

# 日韓の溝、その深さ

# 1 「竹島」というトゲに潜むもの

小説家 金辰明キムジンミン氏と語る

『ムクゲノ花ガ咲キマシタ』という小説をご存じだろうか。一九九三年に韓国で発行され、四〇〇万部に及ぶ大ベストセラーになったサスペンス小説だ。翌年に日本でも翻訳出版されたこの小説のストーリーを要約すれば――。

在米韓国人の天才科学者がひそかに韓国に呼ばれて核兵器の開発にあたり、紆余曲折の末に南北朝鮮での共同開発に成功する。これを発射するときに両国首脳が交わす暗号を「ムクゲノ花ガ咲キマシタ」と決めた。九〇年代末、日本は憲法改正によって専守防衛を超えた攻撃能力をもつようになり、独島（竹島のこと）へ出動。島の占拠に至るのだが、その時、「ムクゲノ花ガ」の暗号が交わされ、核が列島の頭上を越えて日本の無人島に撃ち込まれた。驚いた日本政府は直ちに停戦を申し入れる――。そんな衝撃的な小説だった。

いまの韓国が日本をどう見ているのか。私はまずこの代表的「反日小説」を書いた金辰明氏に会おうと思った。一九五八年、釜山生まれ。大学卒業後、事業の失敗など苦勞のあと小説家にな

った異色の経歴だ。民族主義的な人気作家として執筆を続けているが、インタビュ어의要請に快く応じてくれた。

### ◆ 自衛隊出動で日本に核攻撃が!?

——二〇年前の小説『ムクゲノ花ガ咲キマシタ』には驚きました。ストーリーは推理小説的で面白かったけど、失礼ながら設定は荒唐だと感じました。南北の核共同開発は別問題としても、まさか自衛隊が竹島(独島)を武力で占拠するなんてことは……。

金 いや、そんなことはありません。最近、日本の教科書はみな独島を日本の領土だと書き、「固有の領土だ、韓国が不法占拠している」と教えるようになりましたね。教科書は絶対的なもので、子供はそう信じていく。二〇年もすれば、日本の国民がそう信じるようになり、必ず独島を奪いにきて戦争が起きますよ。

——教科書への記述が増えたのは確かですが、日本は戦後、一度も戦争に参加していませんよ。それでも実力行使で奪いに行くのと?

金 日本は確かに敗戦国として異常なほどの平和国家でやってきましたが、もうすぐ「普通の国」、戦前のような本来の姿に戻るでしょう。そうすると、弱い韓国が領土を占拠しているのを黙って見す



ござでしょうか。だから、戦争が起こる。海軍と空軍の戦いですが、日本はどちらも韓国より強いから、このままだけ独島を占拠する日がきます。

——われわれの実感からは、かけ離れていますね。

**金** それは私たちの世代の考えにすぎない。新世代、つまり小学生の時から「竹島は日本の領土だ」と教科書で勉強した人々が社会に根を張る時代になれば、考えが変わっていますよ。われわれの世代はずっと「韓米日」の同盟体制の下に生きてきて、敵は中国、ロシア、北朝鮮でしたよね。それが急速に崩れている。いま、韓国と中国がとて近づいている。でも、日中は戦争をしにくいので、争いが起きやすいのは韓国と日本。時代は変わっています。

日韓の間で長くノドに刺さったトゲとされてきたのが竹島の領有問題だ。日露戦争さなかの一九〇五年二月、日本政府が島を日本領として島根県に編入する手続きをとった。日本が韓国の外交権を奪う「日韓保護条約」を結ぶのは同じ年の一〇月、そして五年後の韓国併合に至る。やがて日本の敗戦で独立した韓国は「独島はもともと韓国領だ」として返還を要求。紆余曲折の末、サンフランシスコ講和条約は竹島を日本領と見なしたが、韓国は五二年、条約発効前に実力で島を占拠。以来、これを不法占拠だとする日本の抗議や、国際司法裁判所（ICJ）へ委ねようという提案を無視して実効支配を続けてきた。

竹島を日本の固有の領土だとする日本政府に対し、日本による竹島の編入を「韓国併合に向かう侵略の第一歩だった」と見る韓国は、奪還したこの島を独立の象徴と見なしてきた。日韓基本条約では問題が棚上げされたが、韓国は「独島はわが島」という国民教育を徹底する。これに比

べて熱の乏しかった日本でも、二〇〇五年に島根県が「竹島の日」を設け、教科書に竹島を日本領として書く指導も進んだ。自民党は二〇一二年の総選挙で「竹島の日」の式典を国の主権にする方向で公約を掲げ、そこまで実現はしていないものの、安倍政権では式典に政府の代表が出席するようになった。

韓国側の動きでは、二〇一二年八月に李明博大統領が島を訪れたのが日本人の感情を刺激した。韓国には金辰明氏のように「日本が独島を奪いにくる」と信じる人が多いわけではないが、私も「独島を要塞にしなければ」などと言う人に出会ってきた。「もし韓日が独島で戦えば……」という戦闘シミュレーションが新聞紙上などで展開されることも過去にあった。

#### ❖ 日本の変化は止められない

——李明博大統領が竹島に足を踏み入れました。そこから日韓関係が急速に悪化しましたが、実効支配しているのだから、そこまでしなくてもよかったですと思いませんか。

金 いや、よくやったと判断します。実効支配しているのだから静かにしていようというのは、一国の政策として堂々としておらず、何か犯罪者のような振る舞いでしょう。国と国の関係は明快な透明性が必要で、関係悪化を招く側面があっても、大統領の独島訪問によって国の立場を明確にしたことは評価する必要があると思いますよ。

——大いに異論があります、それはそれとして『ムクゲノ花ガク』が韓国で出版されたのは一九九三年。そのころ日本ではほとんど竹島が話題にならなかったのに、どうしてあんな小説を書いたので

すか。

金 私 は未来を読むのです。歴史には一つの流れがある。あのころ深刻ではなかったことが、だんだん深刻になってきましたね。さらに先を見れば、日本の軍事力は整備され、普通の国に戻る。

そう言いながら、金氏は紙の上に曲線グラフを書いた。線は右に向かってなだらかに上がっていき、次第にカーブが急になっていく。

金 いいですか、独島に関する日本の政治、メディア、教育界の雰囲気は、以前はなだらかに進んでいましたよね。だけど、だんだんこんなふうになり始めて、このごろはかなりのカーブです。いまから子供たちに教えていけば、このグラフはもっとせり上がり、やがて頂点へ行く。

実は、この小説を改めて読むと、かつて荒唐無稽に思ったストーリーに少し違ったリアリティが感じられた。たとえば、あのころは空想にすぎないと思われる核兵器の開発が、その後、北朝鮮の手で実現された。さすがに南北共同ではないが、もしいま南北が統一されれば、核は統一国家のものとなる。一方、日本では解釈改憲による「集団的自衛権の行使」に踏み出した。政権与党の自民党は改憲によって自衛隊に代わる「国防軍」保持の公約を掲げ、とりわけ安倍晋三首相は改憲に熱心だ。竹島に対する日本人の関心も大きくなり、教科書への記述もふえた。徐々にだが、曲線カーブが右肩上がりであることは間違いない。

——でも、九〇年代には村山富市首相の「村山談話」をはじめ、日本の首相はかつての侵略や植民地支配をしきりに謝罪しました。その時代、「普通の国」への願望が日本人に強かったとは思えません。最近安倍政権の登場で少し変わってきた気がします……。

金 変わるのが当たり前なのです。日本が韓国や中国、米国に押されつばなしの必要はない。日本がどんだん元の状態に戻るのには正常なことで、それは誰も止めることができませぬ。

——とても意外ですね。私の知る多くの韓国人は、そうは言いませんよ。

金 ええ、でも日本がいつまでも敗戦国のように抑えられているわけにはいかないでしょうし、普通の国に戻りたいという願望は誰にも止められない。韓国人は、それを正常なことだと理解しなければいけない。確かに安倍さんは右傾化に拍車をかけていますが、これは安倍という個人の問題ではなく、日本が敗戦国として正常でない国家形態を強いられてきたからです。もう戦争が終わってかなり経つたし、今の状況は日本が普通の国に戻っていく過程だと思います。

日本が「普通の国」になる、つまり軍隊をもつことを「当然だ」という金氏が、韓国で多数派だとは思えない。日本には昔のような国になってほしくないと考え、普通の軍隊をもつことを警戒する人が多いからだ。だが、金氏は日本が普通の国に戻るのを避けられないと、クールに言い放つ。そう見通すからこそ、この小説を書いたのだろう。

### ❖ 南北分断という痛み

——『ムクゲノ花ガ』を書いたぎっかけには何がありましたか。

金 あれは基本的に日本に向けて書いた小説ではなく、南北朝鮮を何とかしようという小説でした。朝鮮半島の南と北は五〇〇年間、同じ民族で、同じ言語も使っている。だから「南と北が一緒に力を合わせよう」という意味で書いた。日本だってもし分断されていたら、もう一度統一しようとする

はずです。私たちも南と北が一つになって生きなければならぬ。同胞なのだから……。分断を永遠に固定化させるわけにはいかないのでしよう。

——でも、一九八七年には北朝鮮による大韓航空の爆破事件もあったし、その前にはラングーン（いまのミャンマーのヤンゴン）で大統領をねらったテロ事件もありました。九〇年ごろはむしろ「北朝鮮は怖い」という印象をもっていたのでは。

金 だからこそ、だったのです。そういう事件や戦争を回避する方法として、にらみ合う雰囲気を除いたらいい。同じ民族だからお互い理解し、協力しながら生きよう、と。あの小説が出てから、お互いが敵ではなく同胞だと、まず若い大学生たちから大きな変化が起こり、対立がかなり穏やかになった。かつては本当に殺伐としていたじゃないですか。今は何だかんだ言っても開城工業団地の運営とか、お互いに行き交っている。また、わが歴史は自分たちの手でつくっていくべきで、外国と協力して同胞に筒先を向けることはよくない。だから、あの本を書いたのです。

——それはそうとして、南北が力を合わせるために、日本を悪者にしたと言えそうですね。

金 もとを正せば、南北の分断は基本的に日本の侵略から引き起こされたのです。日本が朝鮮半島から撤収したあと、北にはソ連軍が、南には米軍が入ってきた。日本人にはその理解がありません。日本には拉致問題などで北朝鮮への悪いイメージだけがありますが、朝鮮で日本がやったことは拉致よりもひどかった。

拉致問題で北朝鮮に対する怒りが決定的になった日本としては、やはり北朝鮮に多くの人を拉致された韓国民と感情を共有したいのだが、韓国はとかく日本への同情が薄い。金さんの言うよ

うに、過去の日本はもつとひどいことをしたのに……という思いがあるからのもので、それが日本の嫌韓感情を引き出している面もある。朝鮮半島は日本の支配から脱したと思つたら、民族分断と内戦。この悲劇が韓国民に与え続けている痛みや苦しみを日本はもつと理解すべきだと思うが、分断の責任まで問われると、素直にうなずけないものもある。

——分断は基本的に米ソの冷戦の産物ですよ。しかも朝鮮戦争の時追い詰められた北朝鮮軍を支援して参戦した中国のせいではないですか。

金 確かにそういう面もあるから、日本に全面的な責任があるとは言いませんがね……。

#### ❖ 韓中を接近させるもの

——金さんは『皇太子妃拉致事件』という小説も二〇〇一年に書きましたね。日本の皇太子妃を誘拐して、一八九五年に起きた閔妃暗殺の真相を明かすよう日本政府に要求するという極めて刺激的なストーリーです。最近、それを書き直して『新・皇太子妃拉致事件』を出版し、翻訳を中国でも出したとか。

金 ええ、明成皇后（閔妃のこと）はどのように殺されたか、よく考えてほしいのです。日本人数千人が景福宮に来て王妃を引っ張り出し、刀で傷つけたあと、辱しめを与えて、油をかけて焼き殺したのです。一国の皇后を、ですよ。そのことは現地から日本政府に送られた報告書に書かれているのに、日本で教えていない。日本人は礼儀正しいから、事実を知れば謝罪できるはずなのに。

閔妃とは国王だった高宗の王妃で、韓国では一般に明成皇后と呼ばれている。当時、韓国への